

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00990

研究課題名(和文)内外モンゴルの外邦図の歴史学的研究

研究課題名(英文)Historical study of Inner and Outer Mongolian maps made by the Japanese military

研究代表者

二木 博史(Futaki, Hiroshi)

東京外国語大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：90219072

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：1945年以前に日本の軍部が現地で測図して作成した、いわゆる「外邦図」のうち、おもに内外モンゴル地域の10万分の1地図を対象に、各地図に反映された情報を分析するとともに、現地調査でえられた現在の景観や、現在の地図情報と比較、考察した。特に、オランブートルをとる旧駅路にそった地域の地図、および1939年のハルハ河戦争/ノモンハン事件に関連する地図を重点的に分析して日本軍の意図をあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二次世界大戦の終結までの期間に日本の陸軍参謀本部が作成した「外邦図」のうち、内外モンゴルで測図した地図はこれまでほとんど研究されてこなかった。その意味で、本研究課題の遂行によって基本的な部分がある程度あきらかになったことの意義はおおきい。

これらの地図は一方で日本の軍部が過去において内外モンゴルに対する政策を立案したことをしめす具体的歴史資料であるが、他方では当該の地域で最初に作成された近代的地図として一定の価値を有する。

研究成果の概要(英文)：Out of the Gaihozu, military maps produced by the Land Survey Department of the Imperial Japanese Army General Staff Office before the end of World War II, 1:100,000 scale maps of Outer and Inner Mongolia were analyzed and compared with data obtained by field surveys and newly published maps. Through the study of maps of the area along routes connecting Qing era's relay stations including the present-day Ulaanbaatar and the zone along the Khalkh River, where the Battle of Khalkhin Gol or the Nomon Khan Incident erupted in 1939, we are able to clearly understand the Japanese Army's policies towards Outer and Inner Mongolia.

研究分野：モンゴル史

キーワード：外邦図 内外モンゴル 駅路路 ハルハ河戦争 陸軍参謀本部 秘密測図 陸地測量部

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」(東京外国語大学、2002年 - 2007年)の在地固有文書班の事業の一環として、研究分担者と共編で *Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps*, Tokyo, 2005 を出版して以来、モンゴルの古地図の研究にとりくんできた。同書は、東京外国語大学図書館所蔵のモンゴルの古地図の出版・研究であるが、世界のモンゴル研究のなかでは、1960、70年代のドイツのW.ハイシツヒ博士による出版・研究以来の成果として高く評価されている。その後、われわれは科研費基盤研究(C)「モンゴルにおける景観認識の歴史 - 古地図の研究」(2009 - 2011)のなかで、モンゴル国立図書館に所蔵される古地図を中心に、モンゴル人自身により作成された地図の特徴に注目しつつ、古地図のデータベースの構築につとめた。つぎの基盤研究(C)「モンゴルにおける地図作成とガバナンス」(2012 - 2014)では、清朝あるいは独立後のモンゴル王国が支配のための基本的な手段として各地に地図の作成を命じた点に着目した。さらに基盤研究(C)「モンゴルにおける境界と越境の歴史」(2015 - 2017)では、地図資料も利用しつつバルガ人とアルタイ・オリアンハイ人の移動、国境に対する認識について研究した。

これらの研究をすすめるなかで、研究代表者は外モンゴル東部の最初の近代的な地図が日本軍によって作成されたという興味ぶかい事実に気づいた。軍用地図たる外邦図は、精度はたかくなとはいえず近代的な測量方法で測図している点、軍の作戦に有用な情報を重視して街道の位置を精密に記録している点などが、現地で作成された手書きの地図とは決定的に異なる。初期の外邦図は、秘密測量の方法で作成されたため、地名の表記は不正確だが、遊牧社会モンゴルの定住の拠点たる官衙や寺院の位置は比較的正確に記録している。他方、モンゴル現地でモンゴル語により作成された手書きの地図は、固有名詞の表記は正確だが、地形をふくめ地図そのものは精度が低い。したがって、日本がつくった外邦図とモンゴル現地で作成された地図は相補う関係にあり、両者を併用することにより、前近代のモンゴルの景観の復元がより容易になると判断される。

2. 研究の目的

本研究では、主として日本の参謀本部が刊行した軍用地図、いわゆる外邦図のうち、日本の諸機関が内外モンゴル地域で実際に測図をし、陸地測量部等が版下を作成した地図、特に約1000種類がつくられた10万分の1地図を資料とし、第一に、これらがそれぞれの時期にいかなる意図でいかなる方法で作成されたかを、文書史料をふくむ関連の資料をも参照しながら明らかにし、軍用地図作成の決定、実施のプロセスの検証を通じ日本の対モンゴル政策を再検討する。第二に、出版された外邦図を20世紀はじめにモンゴル現地で作成された手書きの地図、あるいは現代の地図と比較することにより、前近代のモンゴル諸地域の景観を復元する。第三に、外邦図のなかに記録された情報のなかで、もっとも貴重なもののひとつとかがえられる寺院の位置の記録に着目し、これをモンゴル仏教史・社会史の基本資料として利用する。

外邦図の研究は、アジアのおおくの地域の地図が研究対象になってきたが、モンゴル地域に関しては測図の時期、測図の過程で生じた現地住民との紛争などについての記述はあるものの、作成された地図そのものを対象にした研究はあらわれていない。したがって内外モンゴルで実際に測図をした地図そのものを研究する本課題は、はじめての試みということになる。モンゴルの外邦図は、日本のモンゴル地域に対する地政学的な関心の証左として残されており、それらの作成のプロセスを追うことは、日本の対モンゴル政策を確実に跡付け得るきわめて意義のある作業といえよう。

3. 研究の方法

当初、日本の国会図書館、アメリカの議会図書館に所蔵される内外モンゴルの10万分の1地図、『中国大陸十万分の一地図集成(1-4)』(科学書院、2002-2007)に収録された内モンゴル地図にえがかれた地域のうち、現地調査が容易な地域を選択し、現在の景観を確認するとともに最近作成された地図との比較をおこなう、という方法を想定した。

2018年度はモンゴル国の首都オランバートルの南の地域の旧街道ぞいに現地調査を実施し、2019年度は中国の内モンゴル自治区のチャハル地方で現地調査を実施することができた。

しかし、コロナ禍の発生のため、2020年度と2021年度は現地調査を中止せざるをえなかった。その結果、地図にえがかれた情報の精密な分析と地図作成の目的の究明という作業に重点をうつすことになった。

4. 研究成果

(1) 2018年度

モンゴルの首都オランバートルから南の旧駅路ぞいのルートが1918年に日本軍によって秘密測量され、10万分の1地図が作成された。研究代表者は2018年8月に、現地の研究者の協力をえて、このルートぞいに現地調査を実施し、地図にえがかれた地形の確認をおこなった。こ

の調査について「外邦図にえがかれたイフプレー南方の旧街道の現地調査」『日本とモンゴル』(138号)にまとめた。

同月のオランバートルでの国際会議で日本軍によって作成されたイフプレー(現在のオランバートル)の10万分の1地図について報告し、同地図が近代的な方法によって作成された同地域の最初の地図という意味で重要な価値を有すること、イフプレーを通過する駅路、近年に敷設された電信線の位置が記録されている点が注目されることを強調した。

なお同地図についてモンゴル語の論文を発表している。“Yaponii janjin shtabiin khevluulsen Ar Mongoliin gazriin zurgiin tukhai,” (S. Chuluun, E. Ravdan, H. Futaki, A. Kamimura eds.) *Mongoliin gazriin zurag, gazriin ner sudlal: Olon ulsiin erdem shinjilgeenii khurliin emkhetgel*, Ulaanbaatar: Admon Print, 2021.

同年9月にロシア連邦ブリヤート共和国のキャフタ市で開催された国際会議では、日本軍によって作成されたキャフタ周辺の10万分の1地図について報告し、日本軍が秘密測量した部分とロシア参謀本部が作成した地図を再利用した部分があること、キャフタの南にあった当時の諸寺院の位置を明記している点に資料的価値があること、シベリア出兵以前に作成されたことが特に重要であることなどを述べた。

なお、キャフタ附近の地図については論文「陸地測量部によるキャフタ近辺の地図の作製1918年の臨時測図班による秘密測図を中心に」『モンゴルと東北アジア研究』(4号)を発表し、陸地測量部の活動の歴史『外邦測量沿革史 草稿』の記録とモンゴルの文書館に保管されている文書史料の記述が一致していることを指摘し、外邦図の作成の具体的プロセスをあきらかにした。

(2) 2019年度

研究代表者は2019年8月に中国・内モンゴル自治区の旧チャハル地方で現地調査を実施し、外邦図にえがかれた地名、景観を現在と比較し、外邦図の記載が正確であり、また自然環境の変化の資料としても有用であること確認した。この調査については「チャハル地方現地調査報告 スウェーデン伝道団の活動拠点あてをたずねて」『日本とモンゴル』(139号・140号合併号)のなかで記述した。

1939年のハルハ河戦争(ノモンハン事件)の要因になった係争地についての当時の主要な軍事地図を整理した。この成果は「1930年代に日本の軍部が刊行したハルハ河地域の地図について」『モンゴルと東北アジア研究』(5号)として発表した。日本がわの刊行した軍事地図にみられる主要な相違点をあきらかにした。

(3) 2020年度

研究代表者は第1に、関東軍司令部が満州国とソ連・モンゴル人民共和国との境界の歴史地図として作成した『十万分一西部国境線関係要図』(1938年)の研究を継続した。本地図にえがかれた「チチハル協定線」に注目し、協定成立までのロシア・清の外交交渉のプロセスを具体的に検討し論文「日本の軍用地図にえがかれたチンギス・ハーンの長城 チチハル協定(1911年)と満州国・ソ連国境」(『モンゴルと東北アジア研究』掲載)を発表した。ロシアは満州里駅の確保のために、1727年のアバガイト議定書(キャフタ協定の一部)でさだめられた国境を変更しようとした。このころみは結局、成功しなかったが、そのかわりに、満洲里北方のかなりの地域を獲得し、国境を南の方向に膨張させることには成功した。

第2に、1937年にモンゴル連盟自治政府、察南自治政府、晋北自治政府の3自治政府の調整機関たる蒙疆連合委員会が成立し、日本軍の統制下に蒙疆政権が1945年まで維持されたが、この時期に作成された2枚の行政区画地図に注目し、「蒙疆政権発行の行政区画地図 蒙疆政権研究のための基礎資料」『日本とモンゴル』(141号)を発表し、これらの地図が蒙疆政権研究の基本的な資料になりうることをしめした。蒙古自治邦政府興蒙委員会総務処『行政区画地図』は、モンゴル地域の農業化、漢化の度合を具体的にしめしている点に特徴があり、また資源地図的な部分は、日本の“植民地政策”とも関連している。

(4) 2021年度

1918年に日本の臨時測図部が外モンゴルで直接測図した地図のうち、サイルス地域(サイルス)の地図を分析し、国際学会で研究発表をおこない、論文「日本軍が1918年に測図したサイルス地域の地図について」『モンゴルと東北アジア研究』(7号)にまとめた。サイルスは、清代においては北京からモンゴル地域の主要な都市へ文書を伝達し、官吏を派遣するための駅路の重要な中継地点であった。1918年に日本軍がこの地域で秘密測図をおこなったのは、ロシア革命後のロシアの内戦に干渉するための軍事作戦のなかで、外モンゴルをとるルートが検討されたためだとかんがえられると指摘した。また同地図にふくまれている情報を整理し、19世紀のすえにプレーからサイルスまでの駅路のくわしい記録をのこしているロシアのA.M.ポズドネエフの記述や日本の大谷探検隊のメンバー野村栄三郎の記録とてらしあわせた。1911年12月にモンゴルが独立を宣言し清帝国との関係を断ったことにより、従来の北京とむすぶ駅路の役割は低下したとかんがえられるが、そのことが本地図にはある程度反映されていることが確認できた。

研究代表者、研究分担者その他2名の共同編纂『モンゴルの地図・地名の研究』(Mongolian

gazriin zurag, gazriin ner sudlal) をモンゴルで刊行した。同書は研究代表者の論文 2 篇 (そのうち 1 篇は外邦図を研究)、研究分担者の論文 1 篇をおさめる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 二木博史	4. 巻 6
2. 論文標題 日本の軍用地図にえがかれたチンギス・ハーンの長城 チチハル協定（1911年）と満州国・ソ連国境	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 179-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二木博史	4. 巻 55
2. 論文標題 蒙疆政権発行の行政区画地図 蒙疆政権研究の基礎資料	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本とモンゴル	6. 最初と最後の頁 148-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kamimura Akira	4. 巻 2020
2. 論文標題 "Belcheer ezemshuulekh" tukhai onol ba praktik	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Mongol ugsaatan sudlal	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二木博史	4. 巻 5
2. 論文標題 1930年代に日本の軍部が刊行したハルハ河地域の地図について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 23-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二木博史	4. 巻 4
2. 論文標題 陸地測量部によるキャプタ近辺の地図の作製ー1918年の臨時測図班による秘密測図を中心にー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二木博史	4. 巻 139/140
2. 論文標題 チャハル地方現地調査報告ースエーデン伝道団の活動拠点あとをたずねて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本とモンゴル	6. 最初と最後の頁 199-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上村明	4. 巻 21-1
2. 論文標題 家畜は境界を越える モンゴル国西部におけるエスニック集団の共生原理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二木博史	4. 巻 53巻2号
2. 論文標題 外邦図にえがかれたイフフレ南方の駅通路の現地調査	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本とモンゴル	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上村明	4. 巻 24
2. 論文標題 エスニック境界を超える牧畜民の協力：モンゴル国西部のオリアンハイ人とカザフ人の事例から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 生態人類学ニューズレター	6. 最初と最後の頁 76-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 二木博史	4. 巻 7
2. 論文標題 日本軍が1918年に測図したサイルス地域地図について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 二木博史
2. 発表標題 日本の軍用地図にえがかれたチンギス・ハーンの長城
3. 学会等名 第13回ウランバートル国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 二木博史
2. 発表標題 1930年代に日本の軍部が作成したハルハ河近辺の外邦図について
3. 学会等名 国際シンポジウム「ハルハ河・ノモンハン戦争80周年：新研究と新成果」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Futaki Hiroshi
2. 発表標題 1930-aad onii uyed Yaponii taliin khevluulsen Khalkhiin goliin khaviin gazriin zuragnuudiig akhiad avch uzekh ni
3. 学会等名 The 12th International Symposium in Ulaanbaatar "80 Years since the Battle of Khalkhyn Gol/Nomonhan: The History, Memories, and Lessons" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 二木博史
2. 発表標題 東京外国語大学図書館に所蔵されるいくつかの貴重な資料について
3. 学会等名 International Conference on "Mongolian Source Heritage in the World" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 二木博史
2. 発表標題 On a map of Ikh Khuree published by the Japanese Army General Staff Office
3. 学会等名 The 11th International Symposium in Ulaanbaatar "Kyakhta and Khuriye: From the Viewpoints of Eurasia" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 二木博史
2. 発表標題 On maps of Kyakhta and adjoining territories drawn by the Japanese Army
3. 学会等名 The International Symposium "History, Heritages and the Future of Kyakhta: From the Dynamism of Russia, Japan, China and Mongolia" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 二木博史
2. 発表標題 20世紀における日本のモンゴル研究の概要
3. 学会等名 Asian Seminar II of the International Association for Mongol Studies in 2018 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村明
2. 発表標題 Tusheet khan aimgiin Dundad khoshuunii nutgiin zurgan deerkh "Ikh Khuree"
3. 学会等名 The 11th International Symposium in Ulaanbaatar "Kyakhta and Khuriye: From the Viewpoints of Eurasia" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 広川佐保、二木博史、都馬バイカル、フフバートル	4. 発行年 2021年
2. 出版社 成文社	5. 総ページ数 100
3. 書名 近代内モンゴルにおけるモンゴル語出版物の歴史ー出版社と知識人を中心に	

1. 著者名 シンジルト、地田 徹朗、上村明他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 名古屋外国語大学出版会	5. 総ページ数 250
3. 書名 牧畜を人文学する	

1. 著者名 E. Ravdan, H. Futaki, A. Kamimura他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Admon Print	5. 総ページ数 201
3. 書名 Mongoliin gazriin zurag, gazriin ner sudlal: Olon ulsiin erdem shinjilgeenii khurliin emkhetgel	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	上村 明 (Kamimura Akira) (90376830)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員 (12603)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------